



神金公民館だより

第188号

2025年
11月1日

神金文化祭

10月27日(月)～11月3日(月)

12:00～17:00

(1日は9:00～17:00)

会場：神金公民館1階ホール



◆展示期間中は、自由に参観していただきますが会場入り口で参観者名簿に氏名の記入をお願いします。

◆11月1日は、JAまつりが開催されます。路駐せずに公民館前駐車場・県道北側駐車場を譲り合って利用してください。

神金トピックス&ニュース

防災訓練

下小田原区の防災訓練が、猛暑を避けて、10月5日に開催されました。水害に備えた土嚢づくりや避難所での段ボールベッドの利用などを体験しました。



神金小運動会

神金小運動会が、10月11日に開催され、伝統となった一輪車の演技も行われ、観覧者から大きな拍手をいただきました。



子どもまつり

9月28日に神栄会主催の「神金子どもまつり」が開催されました。市長が参加した餅投げから始まり、射的やくじ引き、さらに焼きそばやフライドポテトなどの模擬店が開かれました。次世代を担う子どもたちだけでなくお年寄りも参加し、笑顔があふれる楽しいイベントとなりました。



神金の歴史

地元の歴史研究家でもある故飯島卓郎氏が、神金小学校PTA会報「ふもと」に執筆し寄稿した「神金の歴史」をシリーズで紹介します。

郷土の人 三

神金村出身で特出した人に田辺治通氏がいる。この人は逓信省通信局長、大阪府知事、満州国参議、内閣書記官長、逓信大臣、内務大臣等を歴任し日本国での偉人の一人でもある。

治通氏（以下氏とする）は、明治十一年父義信の次男として生まれる。生家は下切、岩波組にて現在の農協共選所の処にあり、酒造業を営んでいた。父義信は分家して一代で財をなし、神金村第三代の村長であり、兄富繁は二十代で山梨県会議員を努めた家系である。

氏は神金尋常小学校（法幢院本堂）四年で卒業、千野高等小学校（千野駐在所西）を四年で卒業し甲府中学校で学ぶ。更に東京第一高等学校に入学、卒業して東京帝国大学法科を卒業するまでの二十年間、数々の逸話を残した。千野学校に通っていた頃、道路沿いの家々では道路傍の使い川にほうとうやおねりの鍋を浸しておいたが、氏は石を投げつけて鍋を割って喜んでいて、それを酒屋の息子がやると追い込まれて、親が新しい鍋を買って謝り歩いたという話は有名である。甲府中学へは甲府の下宿から通っていたが、酒は飲み煙草は喫い、料理屋では芸者を呼んでドンチャン騒ぎをしたり、気に入らない教師の排斥運動の張本人だったり手が付けられなかった。東京第一高等学校では真面目に勉強したので成績はトップで特待生となり、授業料は免除されたそうである。東京帝国大学に入学してからは鼻の下と顎に髭を生やし、学校内外で有名な存在であった。

大学卒業と同時に逓信省に就職し、横浜・新潟郵便局に勤めた後は本省に帰り、逓信事業研究のためフランスに留学を命ぜられた。勉強もよくしたが、酒に酔って裸踊りなどをして逸話も残したそうである。帰朝早々、当時まだ普及してなかった無線電信法の制定を命ぜられ、専心これに取り組み立派な法律を作り信用を得たそうである。

*次ページに続く

神金の歴史

大正三年に世界的社会労働政策の一つとして簡易保険制度が実施された。日本では民間の強い反対があり難しかったが、氏は為替貯金局保険部長に就任し簡易保険の責任者として悪戦苦闘、寝食を忘れ全国を駆けめぐり、創業六ヶ月で加入者二十七万余を得て関係者を驚かせた。今日の簡易保険の基礎を築いたのは実に我が村の田辺治通氏であった。この実績によって逓信省に於いて治通氏が認められた。清浦内閣の時、逓信大臣藤村義朗に見込まれて逓信局長になった。関東大震災の復興に努力したが、間もなく内閣が世論に信を問う総選挙の結果惨敗し、逓借大臣が辞職したので大臣に殉じて局長を辞職した。中には局長だから辞職する必要はないと慰留されたが氏の高潔な精神が許さなかった。

役人になって二十年間、いつも追われるような毎日を送ってきたが、初めて浪人として、しげしげと妻子の顔にも親しみ、花の開落、四季の変化をも知ることができたことは人間として大きな収穫であったと氏は述懐している。又、故郷を思う心篤く、暇を見ては墓参と両親に逢うために神金に帰った。

向嶽寺の管長勝部敬学師とはいつも酒を酌み交わし風論談発し、時を忘れたそうである。役人を退職した治通氏が日頃になく弱々しさが感ぜられたので「おい禅をやれ、座禅をやらんからまだ本物でない」と勧められたそうである。裂石の雲峰寺にも必ず参拝して金比羅さんにも欠かさずお参りしたそうである。

氏は浪人生活で精神的にも経済的にも惨めな経験をしたが、浪人しなければ体験できないプラスもあった。また、国本社運動で平沼騏一郎氏の知遇を得たことである。平沼氏が国本社を設立して国民精神の復興を計ったのに対し、氏もこれに共鳴して現職時代の知友・関係者に呼びかけた。特に全国に配置してある三等郵便局長と連携して全国的に同志を集め大いに活躍し著しい成果を得たことにより、平沼氏の信頼を厚く得て、後年満州国参議に推挙され、更に、平沼内閣の枢要の地位を占める素地をつくったのである。

(参考資料) 田辺拾通伝

